国際寮の教育プログラムにおける司会者と傍参与者による拍手喝采の考察

－円滑な進行・会話参与者間の連帯感を高めるための拍手の使用－

笠高　駿(神奈川大学大学院生)

1. はじめに

本研究では,会話分析の手法を用いて,日本の大学の国際寮におけるイベント場面で観察された特定のシークエンス内で生じる拍手喝采について分析を行い,相互行為上のいかなる行為を達成しているのか理解を深めることを目的とする.これまでの会話分析研究では,拍手喝采という現象に関して政治の演説場面(Atkinson, 1984; Bull, 2006; Heritage & Greatbatch, 1986)や教室場面(Hosoda & Aline, 2010a, 2010b)など様々な制度的場面内で詳細に検証されている.例えば,日本の小学校の英語教室内で生じる拍手喝采は,典型的な教師主導の行為であり「教師の志向が示された期待(teacher's oriented-expectations)」に生徒が応えたことに対する肯定的な評価として,あるシークエンスの終わりの位置で常習的に起こることが明らかにされている(Hosoda & Aline, 2010a, 2010b).これらの会話分析研究に基づき,本研究で使用するデータ内では,拍手喝采がどのようなタイミングで生じるのか,またいかなる行為を達成しようとしているのか「イベント司会者」による拍手と「傍参与者(side-participants: Goffman, 1981)」による拍手の二種類に分類して分析を行う.

2. データ

本研究で使用した会話データは,日本のある大学の国際寮で開催された,計3時間の教育プログラム内での相互行為である.データ内の会話参与者は,多数の日本人学生や様々な国籍を背景とする交換留学生(=傍参与者)と,進行役としての日本人司会者二人(Yuki と Taro)の多者間相互行為である.また,プログラム内で主に使用している言語は英語と日本語である.そして,本研究で用いるデータの寮内プログラムでは,課題解決スキルを身につけることを目的とした「Project Based Learning (課題解決型学習)」を提供する外部企業から日本人司会者を招いて,グループワークを行い寮内の学生同士の交流促進などを目指している.

3. 分析結果

分析の結果,本研究で使用したデータにおいて,一連の連鎖の終結時点における司会者による肯定的な口頭評価(e.g., wow good, very nice, interesting)や謝意を表する発話(e.g., thank you, ありがとうございます)に続けて,司会者主導の拍手,そして,その後すぐに傍参与者による拍手喝采が頻繁に生起していたことが明らかとなった.

下記の事例(1)では,司会者の質問に対する応答が産出された後,その応答が適切な応答であると司会者がみなした様子が観察された.下記の事例は,傍参与者が 7 つのグループに分かれた後,グループごとに考えたイベント企画をグループ内の代表者が一人ずつ発表していく場面である.以下の断片では,イベント司会者である Yuki と Taro が 7 つのグループに分けられた傍参与者に対して,十分間程度の話し合いの時間を設けた後に各グループへ話し合った結果を発表してもらうよう促している場面である.イベント全体を通して,Yuki は主に英語を使用し,Taro は日本語を使用してイベントを進行している.また,このイベントに参加している順番を割り当てられた傍参与者は,国籍に関係なく基本的には英語で発言をしている.

事例（1）[Sharing Group Event: 02:20:44~]
((各グループはイベント企画についてのアイデアを 10 分間話し合い,この断片の直前で Yuki が全体に向けてイベント企画について発表するように指示を出している))
01　Yuki: Regular team. ((Group 7 を指差す))
02　Taro: 何決まったか教えてください

03　Yuki:　so[:: p l e: a s e] share:: (.) your group event idea. (.) to: everyone.
04　Taro:　　[so レギュラーチーム]
05　　(1.4) ((Yuki がGroup 7のメンバーの一人にマイクを渡す))
06　S(G7):　yes. our idea is, movi(e) night.
07　　(0.5)
08　Yuki:　moving?
09　　(0.4)
10　S(G7):　movie (.) night.
11　　(.)
12　Taro:　mo[vie night
13　Yuki:　　[MOVIE NIGHT
14　　(.)
15　S(G7):　yes.
16　Yuki:　oh::: (0.3) so::: ah::: f:or example:: (0.4) ah:: what type of movie.
17　S(G7):　I don't know.
18　Yuki:　ah::: (.) [not yet.]
19　Taro:　　[ま だ]決まってないけど: (.) movie [night.]
20　S(G7):　　[funny] movie.
21　Yuki:　funny movie. (.) OH:: (0.4) o::kay::: (.) o:kay:
22　Yuki:　so::: (.) **>yeah< good idea thank you.**
23　Taro:　thank you
24　　((**Yuki の拍手に続けて拍手喝采が生じる**))
25　Yuki:　so: ah:: Kuritaya girls please share your ah: group idea, (.) to everyone¿
26　Taro:　はい 栗田谷ガールズは? ((Yuki がGroup 6のメンバーの一人にマイクを渡す))

01行目から05行目にかけて, Yukiが最初の発表者としてグループ7(Regular Team)を言及し,さらにメンバーの一人にマイクを渡すことで特定の話者を選択して指示に対する応答の発話を要求している.このような司会者と傍参与者の発話順番の交替に関して,本稿のデータ内では,このような多人数の相互行為において特定の傍参与者が代表して応答をする際には,司会者は一貫してこのような発話順番の割り当て・選択の方法によって傍参与者との順番交替を行っているようである.具体的には,司会者は指示内容を含む発話や質問をはじめにグループ全体へ割り当てた後,再度同じ発話を様々な方法(e.g.,マイクを特定の話者の近くへ持っていく/特定の受け手へ渡すといった振る舞い)によって,次の話し手を選択している様子が観察された.続けて,司会者の指示に対してS(G7)が「our idea is movi(e) night.」と自身のイベントについて発表している.そして,08行目から10行目にかけて挿入連鎖(Schegloff, 2007)が生じた後[1],Yukiは大きな声量で「MOVIE NIGHT」と繰り返すことで理解を示し(13行目)続けてS(G7)が「yes.」と確認を与えている(15 行目).このような司会者の前の応答の繰り返しや,16 行目の「oh:::」という談話標識によって,自身にとって新たな情報を受け止めたことを示している(Heritage, 1984).その後,16行目にてYukiはイベントのアイデアに関するより具体的な情報を引き出すために質問をしている.司会者であるYukiは03行目の指示で伝えているように,この質問を通じて各グループのアイデアを他のグループにも可能な限りわかりやすく共有するというファシリテーターとしての相互行為上の仕事に志向していると考えられる.そして,21 行目から 22 行目にかけて,その質問に対する「funny movie.」という応答の発話(20 行目)をYuki が繰り返すことで理解を示しつつ,加えて「OH::」や「okay」という直前の発話で示されている話者のスタンスを受け入れたことを示す標識を産出している.これらの標識は「最小限の後続拡張(Sequence closing third; Schegloff, 2007,以下SCT)」と呼ばれる隣接ペア(e.g.,「質問—応答」連鎖のような発話の組み合わせ)に付加され,一連の連鎖を終結させるような順番で産出されることが多いと

[1] ここでの挿入連鎖は,直前の聞き取りや理解に関する問題に対処するための「修復の連鎖(repair organization; Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977)」である.Yukiは「moving?」と直前の発話の聞き取りの候補を上昇イントネーションで産出することで修復の開始を行っている(08行目).それに対して,S(G7)は「movie (.) night.」と問題源の発話よりも明瞭な発音で繰り返すことで修復の実行(10行目)を行っている.

されている. そして, これらの標識に加え, 評価や謝意の表現に付随する形で Yuki が拍手を開始している. このような一連の連鎖の終結部にて, 司会者である Yuki は拍手喝采を促すような発話の構築を行い, 次のグループの発表に移行することに成功している. 肯定的な口頭評価をして次の連鎖に移ることにより, その前の連鎖における G7 の応答を司会者が適切なものであったとみなしていることが明らかとなる. よって, 司会者による拍手の先導は応答がその司会者の期待に沿ったものであった時に生じると考えられる.

下記の事例(2)では, 司会者の質問に対する応答が産出された後に, 司会者の肯定的な口頭評価に続く拍手によって拍手喝采が生じ, 次の活動へ円滑に移行する様子だけではなく, その拍手喝采が現在の活動以外のことに従事している複数の傍参与者の注意を惹きつける様子も観察された.

事例（2） [Presenting The Number of Ideas: 01:50:57~]
((この断片の前に, 各グループはイベント企画についての自身のアイデアを出し合い, Yuki がグループごとに出し合ったアイデアの数を聞いている))

```
01   Yuki:  how many ideas do you have now? (.) how many ideas do you have?
02   Taro:  はい何個アイデア出ましたか:?
03   Yuki:  so please count your ideas. (.) please count your ideas.
04   Taro:  はいアイデアの数を数えてみてくださ:い
05   Yuki:  please count your ideas.
06         (1.8)
07   Yuki:  so:: ah:::: team Rokunin No Samurai((=G1)) so: how many ideas do you have?
08          ((Yuki がGroup 1 のメンバーにマイクを近づける))
09  S(G1): |(°twenty seven°)
   Ss(G4): | 立ったままホワイトボードを見ている(図1(左側)参照)
10   Yuki:  twenty seven wow good ideas.
11          ((Yuki の拍手に続けて拍手喝采が生じる))
12   Yuki:  | so: ah::: team Rokunin No Samurai has twenty seven ideas,
   Ss(G4): | 座って Group 2 の方へ身体を向け始める----------------------->>
13   Yuki:   so ah:: team Karaokekan ((=G2)), how many ideas do you have?
             ---------------------------------------------->(図1(右側)参照)
14  S(G2): (°twenty six°)
15   Yuki:  twenty si::x wo::w go:od.
16          ((Yuki の拍手に続けて拍手喝采が生じる))
```

図1. 09行目と12-13行目時点でのグループ4の傍参与者の姿勢の変化

事例冒頭では, Yuki と Taro はグループ全体に対して, ある種の呼びかけとして質問の形式を取った発話を割り当てている(01行目-02行目). この発話に続けて, 各グループが話し合いで出したアイデアの合計数を数えるよう英語, 日本語両言語で指示を出している. 1.8秒の間合いの後, Yuki は「6人の侍チーム(team Rokunin No Samurai」を指名することで特定のグループを選択し(07行目), 事例(1)と同様に自身のマイクをそのグループ内の誰か一人へ近づけることで, 最初の質問に対して特定の話者が応答することを促している(08行目). よって, 続く発話順番で選択されたグル

ープ内の特定の傍参与者がYukiの質問に対して応答することが期待される.その後,6人の侍チームの誰かが返答したことでYukiは「twenty seven wow good ideas.」と肯定的な評価の発話を産出している(10行目).ここで,Yukiは口頭評価に続けて拍手を開始し,その拍手によって複数の傍参与者による拍手喝采が生じている様子が観察される(11行目).同様に,12行目から16行目にかけても「質問―応答―(肯定的)口頭評価+拍手―拍手喝采」という類似した一連の連鎖が生じている.このように,イベント司会者であるYukiの拍手によって誘われた拍手喝采が生じることによって,現在のグループの発表を終結させ次のグループの発表へ円滑に移行するというファシリテーターとしての相互行為上の仕事を達成していることがわかる.さらに,選択されていない他のグループ(09行目の時点でのグループ4のメンバー)の様子に注目すると,拍手喝采が生じるまでは話し合いの最中に使っていたホワイトボードの方を見ているが,拍手喝采が生じた後には12行目から13行目にかけて次のグループ(team Karaokekan)の発表の聞き手になることへ志向している.つまり,拍手喝采によって現在の全体活動(i.e.司会者主導の活動)以外のことに従事している複数の傍参与者の注意を惹きつけ,その場における傍参与者の共同注視が達成されている.

4. まとめ

上記の分析結果より,本研究のデータ内における司会者の(a)肯定的な口頭評価や(b)謝意を表する発話に続けて,司会者主導の拍手,そして,傍参与者による拍手喝采が一連の連鎖の終わりの位置で生起していたことが明らかとなった.まず,受け手の応答が期待に沿った適切な応答であると司会者がみなした時に,拍手喝采を主導していることが明らかとなった.そして,これらの言語的・非言語的資源の使用により,多者間の相互行為において,司会者が現在の活動を終結させ次の活動へ円滑に移行することを可能にしていると考えられる.また,司会者の拍手により傍参与者の共同注視が達成され,一緒に拍手を行う,つまり拍手喝采を行うという行為は,その場における会話参与者間の連帯感を生み出すという相互行為上の仕事を達成するための非言語的資源として利用されている可能性がある.

他にも,司会者による拍手の発生位置がある程度予測可能となった場合には,少数の傍参与者による拍手喝采が司会者よりもわずかに先行しているケースも観察された.そのような場合には,傍参与者はその場における全体活動への積極的な参加へ志向している可能性がある.今回のような多人数参加型の相互行為以外においても,何らかの形で拍手喝采が生じる場合には連鎖構造上のどの位置で生起し(もしくはしないのか),そして,いかなる行為を達成しているか解明する必要がある.

参考文献

Atkinson, J. M. (1984). Public speaking and audience responses: Some techniques for inviting applause. In J. M. Atkinson (Ed.), *Structures of Social Action* (pp. 370-410). Cambridge University Press.

Bull, P. (2006). Invited and uninvited applause in political speeches. *British Journal of Social Psychology*, *45*(3), 563-578.

Goffman, E. (1981). Forms of talk. *University of Pennsylvania*.

Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structure of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 299-345). Cambridge University Press.

Heritage, J., & Greatbatch, D. (1986). Generating applause: A study of rhetoric and response at party political conferences. *American journal of sociology*, *92*(1), 110-157.

Hosoda, Y., & Aline, D. (2010a). Teacher deployment of applause in interactional assessments of L2 learners. *Pragmatics & Language Learning*, *12*, 255-276.

Hosoda, Y., & Aline, D. (2010b). Positions and actions of classroom-specific applause. *Pragmatics. Quarterly Publication of the International Pragmatics Association (IPrA)*, *20*(2), 133-148.

Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge University Press.

Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, *53*(2), 361-382.